

資料1 小太刀 銘 濃州関住人兼定ノ享徳三年二月日 刃長58.3 糶 反り1.5 糶

鑄造、庵棟、鑄の卸が急、小太刀ながら片手打ちの打刀姿。

鍛 小板目肌に歪交えて流れ、乱れた映りが鮮明に立つ。

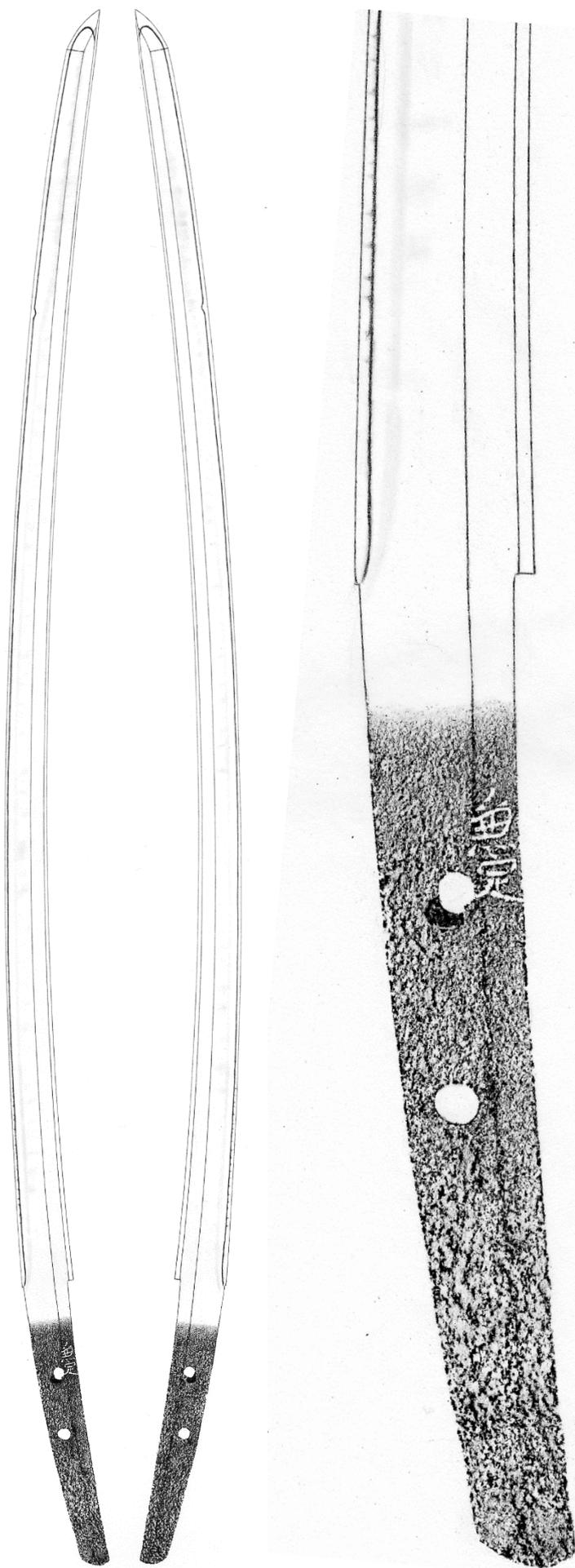
刃文 中直刃、刃淵に小沸づき、鼠足がよく入る。

帽子 表は浅く弛んで先中丸となり、ごく浅く返り、裏は小丸となり、深く返る。

資料2 刀銘 兼定 刃長71. 2糎 反り2. 3糎

鑄造、庵棟、鑄やや高く、細身ながら元先の幅差が大きく、反り深い太刀姿。

鍛 板目よく練れて刃寄り流れ、刃寄りに鮮明な直ぐ映りが立ち、その上に地斑映りが重なり、物打ち辺りは乱れ映りと変化する。  
刃文 匂い出来の細直刃、腰元に鼠足が掛かり、表裏とも物打ちに節刃を一つ置く。  
帽子 直ぐに先中丸となり、素直に返り、倒れる。



資料3 刀銘 濃州関住兼定作 刃長62.3糎 反り1.97糎

鎬造り、庵棟、鎬のやや高い片手打ちの打刀姿。

鍛 板目肌よくつみ、総体に流れて柁がかり、乱れた映りが鮮明に立つ。

刃文 小互の目に小丁子、尖り刃を交えてややこづみ、刃淵沸つき、葉、足が盛んに入り、微細な砂流しと金筋が掛かる。

帽子 表裏とも尖り互の目を一つ置き、表は先小丸に返り地蔵風、裏は一段と沸づいて先尖り、ともに返りは深い。



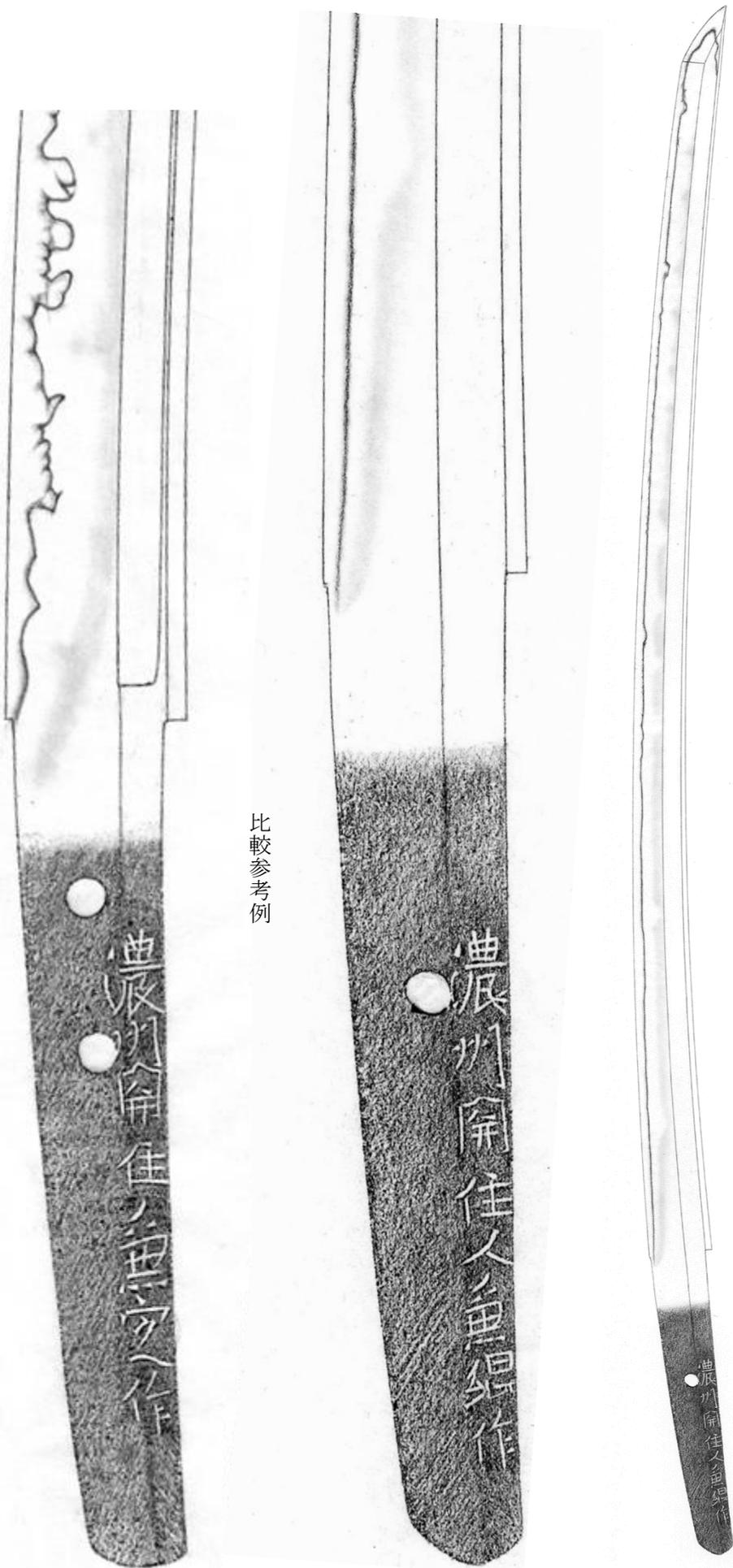
資料4 刀銘 濃州関住人兼綱作 刃長66.2糎 反り1.7糎

鎬造り、やや低めの庵棟、鎬幅広く鎬高く、平肉付く。

鍛 板目、刃寄りは流れ杵となつて詰み、鎬地は大板目が肌立ち、乱れた映りが鮮明に立つ。

刃文 直刃を基調に節刃を交え、刃淵にほつれごろが有り、裏腰元に足入る。

帽子 表は小さく湾れ、尖りごろに先小丸となり地蔵風、浅く湾れて深く返る、裏は直に先中丸、僅かに沸づいて掃き掛け、深く素直に返る。



比較参考例

